

アルクとハシル

歩くことと走ることはもとも基本的な移動手段であり、動作であり、それが文化普遍的であることに疑いはないだろう。ところで、足を動かして移動するという一連の動作を日本語ではアルクとハシルというふたつの語で分類するが、果たして他の言語でも、そうだろうか？

日本語のアルクとハシルをいっしょにしてしまう言語、つまり「足で移動する動き」に対する語がひとつしかない言語を筆者は知らない。逆に足を使った移動の動作をもっと多くの動詞で区別する言語はたくさんある。一般に英語、ドイツ語などのゲルマン系の言語は細かい様態を多くの動詞で区別するが、フランス語、スペイン語などのロマンス系の言語はこのような様態の区別を動詞であまりしない。日本語はその意味でロマンス語に似ているが、動きをあらわす擬態語が豊富にあり、歩く動作も、「ちよこちよこ」「ずんずん」などと言いわけることができる。

異なる数

ウォーキングマシンの速度の設定を上げていくと自然に「アルク」動作から「ハシル」動作に変わっていく。筆者はこの速度を少しずつ上げていったとき、日本語、英語、オランダ語、スペイン語の話者がそれぞれの速度での動作をどのような動詞を使って表現するかを調べてみた。すると、使われる動詞の数は、言語によって、かなり違うことがわかった。日本語が一番少なく、「歩く」と「走る」のふたつの動詞のみが用いられた。一方スペイン語は三つの動詞、英語は四つ(walk、

「アルク」「ハシル」の認知と言語表現

今井 むつみ 慶應義塾大学教授

Jog, run, sprint) オランダ語はもっとも多く、七つの動詞が使われた。これだけから見ると言語はそれぞれ好きな細かさで足を使った移動動作を分割しているように見える。しかし、実際には四つの言語のあいだで非常に興味深い共通性も見られた。

まもられる境界

動詞の数がふたつしかない日本語では、アルクとハシルの境界は非常につきりしており、ほぼ全員が、ある一定の速度に達したときいきなり、アルクからハシルに切り替えた。英語話者とスペイン語話者は、日本語のアルクに相当する速度に対して、walk と caning をそれぞれ使っているが、日本語でアルクからハシル速度に変わったとたん、彼らも違う動詞に切り替わった。オランダ語は、日本語話者がアルクと表現した速度に対して四つの動詞を使いわけていたが、日本語のハシルに相当する速度に達したとき、やはり別の動詞に変わっていた。つまり、これらのことばでは日本語でアルク、ハシルに相当する表現をいくつに細分するかにおいては異なるが、日本語のアルクとハシルの境界は、どの言語でも同じ動詞がまたいで使われることはなかった。つまり、アルクとハシルの境界はまもられていたのである。

以上から、足を使って移動する一連の動作をどのくらい動詞によって細分し表現するかは言語により異なるが、アルクという動作とハシルという動作に本質的な違いがあり、どの言語の話者もその違いを知覚し、動詞により表現しわけていると考えることができそうである。